8．縄文時代前期「曽畑式土器」について

(1)　曽畑貝塚の調査の歴史

曽畑貝塚の調査の歴史は古く明治中期にのぼり、日本の考古学の進展に当初から参加してきており、九州地域においてもっとも早くから注目されてきた遺跡である。そして日本国内の縄文時代研究の枠を越えて、早くから大陸との関連が問われてきたことも周知のことである。

「古くはA，B地点の周囲の水田一面にも貝殻が在ったのだが明治年間に掘り下げて水田とせられたのであった。」とは、清野謙次氏（1969)『日本貝塚の研究』に記せられた、本来の曽畑貝塚の分布状況・範囲を明確に教えてくれる貴重な報文である。明治年間に「貝殻をとって石灰に焼く」という商業が行われた程に大規模の貝塚であったことが知れるし、現存する貝塚へと一帯となり繋がっていたことも理解される。曽畑貝塚が学会に初めて登場するのは若林勝邦氏（1890)『東京人類学会雑誌』第5巻第49号であり、中山平次郎氏（1918)『考古学雑誌』第8巻第5号「肥後国宇土郡花園村岩古曽字曽畑貝塚の土器」が著名である。発掘調査は行われておらず採集された土器や石器の紹介が行われたものであるが、当時から「細形刻紋」土器として注目され朝鮮半島の土器や南島から出土する土器との関連に注目されできている。

1923年に清野謙次氏の発掘調査が実施されている。土器では轟式土器・曽畑式土器・阿高式土器・鐘ケ崎土器などが出土しており時期的に複合した貝塚であることが知られ、石器や貝類など豊富な遺物が出土している。曽畑式土器の文様について⑴点線並列紋、⑵短直線或いは長めの直線の並列紋、⑶短直線を斜めに並列させて羽状とした紋様、⑷直線を組み合わせて重複三角形に近い紋様、⑸直線を組み合わせて重ねた四角形紋様、⑹直線を組み合わせて重ねた菱形紋様との分類が行われており、それは今日の分類作業の原典ともなっている。

宇土半島基部には当時から著名な貝塚が多く宇土市轟貝塚、松橋町大野・宮島貝塚、城南町阿高・御領貝塚などがあり、九州の貝塚研究の先駆をなしてきている。1930年鳥居龍蔵の来熊により御領貝塚の発掘調査が行われ、これを契機に肥後考古学会が発足し、地元の研究者による本格的な活躍が始まることになる。著名である小林久雄氏の『肥後縄文土器編年の概要』（1935)、『九州の縄文土器』（1939）などの発表がある。曽畑貝塚にも小規模の発掘調査を行ったり、幾度となく通われ曽畑式土器の分析と編年的位置づけが行われることになる。

氏による曽畑式土器の位置づけは当時の少ない資料、大規模の発掘調査ができないなかにあって大きな変移を見ながら見事な編年大系が築き上げられている。当初、「肥後縄文土器の上限に阿高式土器を置くことは、大体に於いて許容されるべきこと」との視点から轟式土器・曽畑式土器は後行するものとされながら、一方においては関東や中国地方の貝塚調査に於ける層位的事例に比較して阿高式土器を最上限に位置づけることに疑問も発せられている。『縄文式土器の研究』。

肥後の縄文式土器

形式名				
早水台 沈　目 戦場谷 田中白坂 石清水	石　坂	曽　畑 日勝山	轟　AB 轟　C	早期
	吉　田 塞ノ神	手向山	轟　D 日木山 阿　多	前期
竹　崎		阿　高 頭　地 出　水 南福寺 指　宿	岩　崎 綾　A	中期
	御手洗A 市　来	渡鹿（西原） 鐘ヶ崎 御手洗B 西　平 三万田K	植　野	後期
		御　領 ワクド石 黒　川 （三万田B） 山ノ寺 夜　臼		晩期

小林久雄（1939）（『城南町史』より　一部補記）

但し、阿高式土器とは製作技法の相違、文様の著しい相違が指摘され、直接的な推移を否定。「全く他の文化的要素の介入と考えざるを得ない」とされた。そして、「轟式土器が茅山式土器並びに東三洞土器に類似すると同様に、此種土器も東三洞及牧ノ島瀛仙町貝塚土器と対比すべきもので、其三角組合文及異方向の集束平行線の組合の如き、文様としての類縁を辿る事が出来やう。尚南方奄美大島の土器にも多少の類縁があるのであろうが、殊に琉球土器との関係は相当密接なものがあり、恐らくは之等が琉球土器の祖原を成すものであろう。」との記述は今日にして揺るぎのない視点となっている。

『御手洗遺跡の土器に就いて』において御手洗式土器の分類位置づけに関して大きな展開が見られる。御手洗遺跡出土土器の分類により、ついには縄文の施文形態を通して阿高－御手洗－西平－御領との変遷に到達されているのである。ここで、いまだ轟式土器、曽畑式土器とも御手洗式土器の範疇としながら、松橋町宮島貝塚の発掘調査を通しての轟式土器と曽畑式土器との層位的上下関係を重視し前者が古いこと、そして轟式土器がかなり古くなるとの予感を感ぜられるのである。

『薩摩国枕崎町花渡川遺跡』によって第一類（細形刻文）、第二類（条痕文）、第三類（隆起線文）、第六類（太形凹文）との分類がおこなわれ、曽畑式土器及び轟式土器が層位的な確証はな

いとしながらも古く位置づけはじめられている。そして、『肥後の縄文式土器』に到って明確に阿高式土器から御領式土器へとの系統を論ぜられるとともに「私は以前の考えよりも轟・曽畑を古く考えています。これは阿高、其の他と、直接に関係づける関連性が非常に少ないのであります。」と記述がなされているのである。

戦後は1959年、慶応大学考古学研究室江坂輝彌氏を中心とした調査団による発掘調査が実施されている。現在、曽畑東・西貝塚と呼ばれる一帯の調査であり、東西50m×幅２mと直交する10m×２mを２本、合計３本のトレンチを設けて実施されている。以下、当時地元で報じられた成果を見ると、まず清野謙次氏の調査地点を中心としていた貝塚の分布範囲は、北側の台地まで拡がっていることを明らかにして、東貝塚と西貝塚とに分けられることが判明している。東貝塚は縄文後期を主体としているが、西貝塚は縄文早期から後期まで４層に分層ができている。「表土下20㎝のところに厚さ20～30㎝の第１貝塚があり、出土する土器は縄文後期のものに限られる。その下部が第Ⅱ層で厚さ10㎝の土。第Ⅲ層は貝層で30㎝、礫が多く貝もハマグリなど大型のものばかりで、出土する土器は弧線文（上部）直線文（下部）の特徴がはっきりした曽畑式だった。第Ⅳ層は褐色土が40㎝ほどあり、その下は赤粘土になっている。第Ⅳ層に含まれる土器には貝殻条痕文や細い隆起線の文様があり曽畑式よりも古いものと推定されている」。

今日の考古学調査成果から付近の土層と比較すれば、第Ⅴ層の赤粘土が「鳥栖ローム層」に相当し、第Ⅳ層は本来的であれば下位から「ニガシロ層」－「黒褐色粘質土層」－「黄褐色土・アカホヤ層」となりそうである。40㎝の厚さがあることから「アカホヤ」をめぐる層位的把握のできる可能性を有していると見れよう。出土した曽畑式土器は深鉢と鉢形土器であるが、明確に横位の区画を施したり、刺突文を施文した土器が見られず、短直線や山形文を複合させる資料が多い。縦位の区画を施したり、短直線を主とした口縁部内面の施文率が高いようである。清野謙次氏の発掘調査出土資料では、横位の区画をなし、刺突文や複合鋸歯文を施した資料が報告されている。今回の発掘調査でも後者の資料の出土があり、これらの資料比較・分析作業を必要としている。

1976年建設省一般国道３号松橋バイパス建設計画に伴い、熊本県教育委員会が貝塚の西南方向約100m離れた水田地に試掘調査を実施。縄文時代前～後期の良好な包含層を検出しており、両者の協議を進め今回の調査に至っている。貝類も若干出土しており貝塚が拡大する可能性も考えられ、また検出された曽畑式土器には口縁部に刺突文を施したものも見られ、土器内容の拡充も期待された。

⑵　熊本県内出土の曽畑式土器

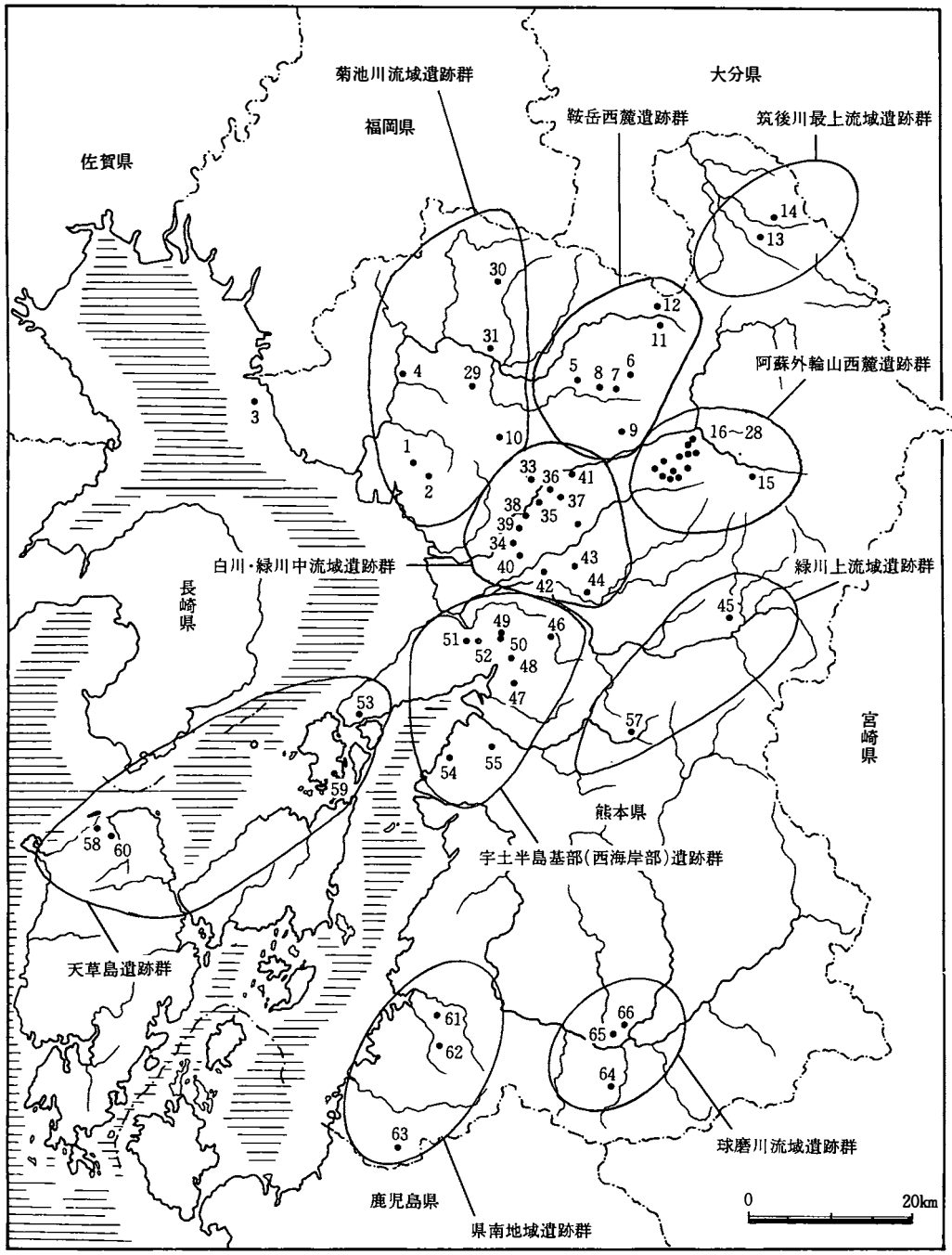
今日まで熊本県内から出土した曽畑式土器の遺跡地名と関係文献目録を次表の通り作成している。

第13表　曽畑式土器関係主要文献一覧表　　（引用・参考文献）

番号	著　者	報　告　名	文　献　名	巻　数	年　代
1	若林　勝邦	肥後旅行記	東京人類学雑誌	5-49	1890
2	中山平次郎	肥後国宇土郡花園村岩古曽字曽畑貝塚の土器	考古学雑誌	8-5	1918
3	清野　謙次	肥後国宇土郡花園村大字岩古曽字曽畑貝塚	歴史地理	43-2	1924
4	同	日本原人の研究			1925
5	小林　久雄	九州の縄文土器	人類学先史講座	11巻	1935
6	小林　久雄	肥後縄文土器編年の概要	考古学評論	1-2	1953
7	乙益　重隆	肥後上代文化史			1954
8	松尾　禎作	佐賀県西唐津海底遺跡	日本考古学年報4		1955
9	乙益　重隆	肥後のあけぼの	日本の歴史Ⅰ		1958
10	同	熊本県上益城郡カキワラ貝塚	日本考古学年報	8	1959
11	江坂　輝彌	曽畑貝塚発掘調査報告	第15回日本人類学会研究発表抄録		1960
12	松本　雅明 富樫卯三郎	轟式土器の編年	考古学雑誌	47-3	1961
13	杉村　彰一	曽畑式土器文化に関する一考察	熊本史学	23	1962
14	同	曽畑式土器論考	九州考古学	24	1965
15	賀川　光夫 坂田　邦洋	曽畑式土器に関する一考察	同	22	1964
16	城南町	城南町史			1964
17	江坂　輝彌	縄文土器　九州編　(6)	考古学ジャーナル	13号	1967
18	乙益　重隆	縄文文化の発展と地域性(10)　九州西北部	日本考古学Ⅱ縄文時代		1967
19	清野　謙次	肥後国宇土郡花園村大字岩古曽字曽畑貝塚	日本貝塚の研究		1969
20	中村　　慎	曽畑式土器	縄文文化の研究（雄山閣）		
21	佐世保市教委	下本山岩陰			1972
22	坂田　邦洋	曽畑式土器に関する研究　江湖貝塚			1973
23	江上　敏勝	「原始」	竜北村史		1973
24	坂田　邦洋	曽畑式土器に関する研究　尾田貝塚			1974
25	同	曽畑式土器に関する研究　曽畑式土器の形態			1975
26	同	対馬越高尾崎における縄文前期文化の研究			1975
27	江本　直他	微雨・曽畑	熊本県文化財調査報告第19集		1976
28	江坂　輝彌	朝鮮半島櫛目文土器文化と西九州地方縄文前期文化の曽畑式土器との関連性について	考古学ジャーナル	128号	1976
29	佐賀県立博物館	九州の原始文様			1977
30	金峰町教委	阿多貝塚	金峰町埋蔵文化財調査報告書(1)		1978
31	松本　健郎	菊池川流域文化財調査報告書	熊本県文化財調査報告第31集		1978
32	松村　道博編	中後迫遺跡調査報告			1978
33	杉村　彰一	曽畑土器考	「九州の原始文様」佐賀県博		1978
34	高宮　廣衛	縄文時代の沖縄諸島	同　上		1978
35	江坂　輝彌	朝鮮半島と西北九州　櫛目文系土器と曽畑式土器	同　上		1978
36	熊本大学考古学研究室	桑鶴土橋遺跡(2)	研究室活動報告(5)		1979
37	坂田　邦洋	C14年代からみた九州縄文時代の編年	別府大考古学研究報告2		1979
38	福岡市教委	四箇周辺遺跡調査報告書(4)	福岡市埋蔵文化財調査報告書63		1981
39	久留米市教委	野口遺跡	久留米市文化財調査報告第28集		1981
40	松岡　　史 森　醇一郎	佐賀県西唐津海底出土の縄文土器	考古学ジャーナル	188号	1981
41	賀川　光夫	いわゆる曽畑式土器の問題	考古学ジャーナル	188号	1981
42	淀江町教委	宇田川			1981
43	田中　良之	曽畑式土器の展開「末盧国」			1982
44	賀川　光夫	曽畑式文化について			1982
45	田島　龍太	菜畑遺跡縄文前～中期の土器群の編年と様相	菜畑		1982
46	西原村教委	西原村の史跡と文化財			1982
47	渡辺　康行	深堀第Ⅲ群土器について	深堀小学校		1983
48	五和町教委	沖ノ原遺跡			1984
49	平田　豊弘他	「原始・古代」	苓北町史		1984
50	久原　巻二	西北九州沿岸の沖積世海面変化	長崎北陽台紀要(1)		1985
51	松藤　和人他	伊木力遺跡　第2次発掘調査概報	多良見町教育委員会		1986
52	水ノ江和同	西北九州における曽畑式土器の諸様相	同志社大「考古学と地域文化」		1987
53	甲元　眞之	Ⅰ　先史時代の対外交流	日本の社会史第1巻列島内外の交通と国家		1987
54	浦田　信智編	曲野遺跡Ⅲ	熊本県文化財調査報告	第75集	1985

第14表　熊本県内曽畑式土器出土遺跡一覧表

No.	遺跡名	所在地	調査	遺物保管	文献
1	竹崎貝塚	玉名郡天水町竹崎	発掘調査	玉名高校	24
2	尾田貝塚	〃　〃　尾田	〃	天水町教育委員会	24
3	ヒイデン洲海底遺跡	〃　長洲町ヒイデン洲	採集		
4	若園貝塚	〃　菊水町大字江田字若園	発掘調査	菊水町歴民資料館	15
5	松ケ平　遺跡	菊池郡旭志村大字尾足字松ケ平	採集		31
6	桜ケ水　遺跡	〃　〃　大字麓字桜ケ水	〃		23
7	御願所七尾遺跡	〃　大津町字御願所七尾	〃		23
8	牟田平遺跡	〃　〃　牟田平	発掘調査	菊池高校	
9	中後迫　遺跡	〃　〃　中後迫	〃	熊本県教育委員会	32
10	野々島　遺跡	〃　西合志町字野々島	採集		
11	水源石川遺跡	菊池市大字水源字石川	〃		
12	伊野遺跡	〃　原字伊野	〃		
13	満願寺ヒゼンコ遺跡	阿蘇郡南小国町大字満願寺ヒゼンコ	〃		
14	田の原　遺跡	〃　〃　田の原	発掘調査		
15	久木野中校庭遺跡	〃　久木野村猶須久木野中校庭	〃		
16	鳥子葛目　遺跡	〃　西原町鳥子葛目	〃	西原村教育委員会	
17	古閑　遺跡	〃　〃　古閑	〃	〃	
18	襟の平　遺跡	〃　〃　襟の平	〃	〃	
19	宮山牟田　遺跡	〃　〃　宮山牟田	〃	〃	
20	宮山本村　遺跡	〃　〃　宮山本村	〃	〃	
21	宮山宮の後　遺跡	〃　〃　宮山宮の後	〃	〃	
22	宮山出の口　遺跡	〃　〃　宮山出の口	〃	〃	
23	宮山多々良　遺跡	〃　〃　宮山多々良	〃	〃	
24	桑鶴土橋　遺跡	〃　〃　小森字桑鶴土橋	発掘調査	熊本大学文学部	36
25	古屋敷　遺跡	〃　〃　古屋敷	採集	西原村教育委員会	
26	本屋敷　遺跡	〃　〃　本屋敷	〃	〃	
27	大切畑　うしろ迫　遺跡	〃　〃　大切畑うしろ迫	〃	〃	
28	扇坂の下　遺跡	〃　〃　扇坂の下	〃	〃	
29	広　遺跡	鹿本郡鹿央村大字広（諏訪原）	〃	〃	
30	天ノ岩戸洞穴	〃　菊鹿町大字山内字鶴次郎	発掘調査	熊本県教育委員会	31
31	方保田東原　遺跡	山鹿市方保田東原	〃	山鹿市教育委員会	
32	戸島　遺跡	熊本市戸島町			
33	竜田町陳内　遺跡	〃　竜田町大字陳内字戸ノ上	発掘調査	熊本県教育委員会	
34	神水　遺跡	〃　神水	〃	〃	
35	新南部・潤野遺跡	〃　新南部町西谷	〃	〃	
36	上南部遺跡　A地点	〃　上南部町	〃	熊本市教育委員会	
37	迎八反田　遺跡	〃　迎八反田	採集	〃	
38	渡鹿小磧原　遺跡	〃　大江町渡鹿小磧原	〃		
39	保田窪　遺跡	〃　大江本町保田窪	〃		
40	大曲　遺跡	〃　画図町大曲	〃		
41	上古閑　遺跡	〃　弓削町上古閑	〃		
42	カキワラ貝塚	上益城郡嘉島町上六嘉	〃		10
43	小池原　遺跡	〃　〃　小池原	〃		
44	辺田見貝塚	〃　御船町辺田見	〃		
45	片平　遺跡	〃　矢部町大字城平字片平	〃		
46	阿高貝塚	下益城郡城南町阿高	発掘調査	城南町歴民資料館	
47	宮島貝塚	〃　松橋町宮島	〃		5.6
48	曲野　遺跡	〃　松橋町曲野	〃	熊本県教育委員会	54
49	曽畑貝塚	宇土市岩古曽町曽畑	〃	慶応大学文学部	
50	曽畑貝塚低湿地　遺跡	〃　花園町花園	〃	熊本県教育委員会	
51	轟貝塚	〃　宮ノ荘轟	〃	京都大学文学部 熊本大学文学部	12
52	馬場神山中坪遺跡	宇土市大字馬場	採集		
53	波多崎貝塚	宇土郡三角町波多崎	〃		
54	産島貝塚	八代市産島	〃		
55	四ツ江貝塚	八代郡竜北町四ツ江	〃		
56	泉村第四中学校校庭遺跡	〃　泉村第四中学校校庭	〃		
57	柿迫貝塚	〃　〃　柿迫	〃		
58	沖ノ原貝塚	天草郡五和町二江字沖ノ原	発掘調査	五和町歴民資料館	
59	柳貝塚	〃　大矢野町柳	採集		
60	黒染地　遺跡	〃　苓北町大字坂瀬川字黒染地	〃	本渡市歴民資料館	49
61	石神　遺跡	水俣市小津奈木石神	〃		
62	深川平野　遺跡	水俣市深川平野	〃		
63	湯出招川内　遺跡	〃　湯出招川内	〃		
64	鳴石　遺跡	人吉市木地屋町鳴石	〃		
65	上ノ寺　遺跡	〃　願成寺町上ノ寺	〃		
66	鼓ケ峰　遺跡	〃　願成寺町鼓ケ峰	発掘調査	熊本県教育委員会	
67	里田岡留神社　遺跡	球磨郡免田町字里田岡留神社	採集		



第118図　熊本県地域縄文前期曽畑式土器分布状況図

熊本県内で曽畑式土器を出土した遺跡は一覧に示す通り、約70カ所を数えている。殆どが採集作業での確認に委ねられていることは否めず、発掘調査や採集作業の進度の差異があることを前提としなければならないが、大まかな分布傾向は求めることができよう。

分布図の作成を行うと、県内の中北部に大半が存在し、南部地域や天草地域では散在した状況を示している。周知のように前者には菊池川・白川・緑川、後者には球磨川らの主要な河川が存在し、遺跡の分布に大きな係わりがあることを述べられよう。そして遺跡群を大きく捉えると、筑後川最上流域遺跡群、菊池川流域遺跡群、鞍岳西麓遺跡群、阿蘇外輪山西麓遺跡群、白川・緑川中流域遺跡群、宇土半島基部(西海岸部)遺跡群、球磨川流域遺跡群などとして捉えることができる。

〔筑後川最上流域遺跡群〕

県下の最も北側に位置し、九州山地を構成する久住山・涌蓋山の西麓で700～800m上の高原帯に立地している遺跡群である。筑後川の最上流域であり、東九州地域との関連を求める作業に重要な地点である。すでに、下城遺跡の発掘調査等を通して、後期旧石器時代や縄文時代早期における人為的痕跡が知られている地域でもある。縄文時代前期の遺跡や遺物について大きく明らかにされた段階ではないが、この地域にも足跡が確実に残されていることが述べられる。

〔菊池川流域遺跡群〕

下流域では貝塚〔尾田・竹崎・若園〕を形成し、このなかで最も高い若園貝塚が海抜約11mである。土器群内容は、すでに発掘調査が行われ報告された尾田貝塚に求められるが、調査者は沈線の幅が広くて浅いものが多く、文様構成も乱れているため曽畑式土器の終末期のものと判断がなされている。地理的には西海岸域であり、今後先行する土器群が検出されてしかりであるが、中流域の台地上での分布が非常に少ないのも特色である。発掘調査が行われた天ノ岩戸洞穴での遺物がみれ、波状をなす口縁部の深鉢で刺突文や複合鋸歯文での文様構成がある。滑石の混入もあり、下流域の資料よりも古い様相を示している。なお、最上流域の菊池市水源地区にも数ケ所遺物が出土している。支流である合志川の上流域に遺跡群があり、次に鞍岳西麓遺跡群として捉えている。

〔鞍岳西麓遺跡群〕

阿蘇外輪の一角をなす鞍岳西麓一帯に纏まった遺跡群が所在する。高度200～400mの壮大な傾斜地では中後迫遺跡に代表され、複合する文化層が検出される。火山灰層にも恵まれ、文化層の層位的な把握が可能なところである。事実、中後迫遺跡では「アカホヤ」層の上位から曽畑式土器が出土している。２～４条の刺突文と、区画をなし複合鋸歯文を施した土器は底部まで施文が及び古い様相の残存傾向を見せている。

〔阿蘇外輪山西麓遺跡群〕

白川左岸で海抜高度200～300m上に立地し、西海岸部から35㎞程内陸部に入った地点となる。広大な平地が広がる中に県内で最も集中する遺跡群が所在する。阿蘇カルデラ内で遺跡は少なく、僅かに南郷谷で久木野中学校校庭遺跡が確認されているのに止まるので、この流域での東限を示

すことになる。言わば、東進の行き止まり現象とでも捉えられるのであろうか。桑鶴土橋遺跡の発掘調査が実施されており、多くの資料が提示されており、多くの資料が提示されている。出土している深鉢は概して刺突文が少なく、短直線からの開始が多い。特徴的に殆どの口縁部内面に施文があり、やや外反した口縁部も多い。出土層も「アカホヤ」上位に求められている。

〔白川・緑川中流域遺跡群〕

白川左岸段丘上に集中傾向があり、海抜高度30～50m上に位置し、西海岸部からの距離は20㎞以内である。白川流域では右岸に少なく、遺跡は左岸に多く位置する状況は縄文時代の各時期や他の時代でも同様の傾向が指摘され、河川敷への高さに起因するものと理解されている。そのような中で、今回発掘調査が実施された熊本市竜田陳内遺跡は右岸に位置し、良好な資料を提示している。一方、緑川流域で台地縁に立地する嘉島町や御船町では貝塚が形成されている。カキワラ貝塚と辺田見貝塚であり、高度10mを下がり最も内陸部の貝塚となる。

竜田陳内遺跡での土器群は滑石の混入率が低いこと、口縁部に刺突文の施文が非常に少なく、口縁部内面の施文が多いなど特色があり、県内西海岸部土器に比してやや新しい時期であることを示すかにある。一方、カキワラ貝塚の土器には刺突文や区画それに複合鋸歯文の施文が見られ、古い様相を如実に示している。

〔宇土半島基部（西海岸部）遺跡群〕

著名な曽畑貝塚・轟貝塚・阿高貝塚・宮島貝塚など大貝塚群が形成されている。海抜高度10m以下の台地縁に立地し、縄文海進期においては、海辺に位置していたものと見られる。そして何れも内湾で遠浅が拡がり、背後には雁回山や白山などの山稜がひかえるなど、自然環境に究めて恵まれた場所が選ばれている。

今回の発掘調査によって低湿地に貯蔵穴群が形成されている事実が判明し、貝塚の捉え方に変化が求められてきている。轟貝塚近くの馬場遺跡の貯蔵穴群も当然同様の形態を持つものと評価されようし、今後、各貝塚の新たなる調査と構造の解明を図らなければならない。

出土した土器群も従来の曽畑貝塚出土土器に比して、深鉢は刺突文や区画、複合鋸歯文などの施文が活発である。両者に時間的な幅が指摘できるもので、この遺跡の開始がより早いものであったこと、そして、長期に亘る遺跡であることが指摘される。

このほか、海岸近くに位置する遺跡として八代地域の四ツ江・産島貝塚や天草島の著名な二江・柳貝塚があるが、貝塚内容の把握作業を進めなければならない。

〔その他遺跡群〕

南部地域や球磨・人吉地域での状況が次第に明らかにされてきている。特に、後者では鼓ケ峰遺跡の発掘調査があり、内陸部に40㎞も入った地域の特色が提示されている。口縁部の外反状態や文様構成・施文など地域性を示すかにある。

⑶　熊本県地域における曽畑式土器の編年

県内で見られる曽畑式土器の検討作業を行い、編年案を次図に示しておきたい。前述の遺跡群の時間的移行は凡そ〔宇土半島基部（西海岸部）遺跡群〕→〔菊池川流域・白川・緑川中流域遺跡群〕→〔鞍岳西麓・阿蘇外輪西麓遺跡群〕→〔筑後川最上流域・球磨川流域遺跡群〕として捉えられるであろうとの観点から進めている。そして、宇土半島基部（西海岸部）遺跡群の土器群を第Ⅰ期として第Ⅳ期まで順次捉えてみたものである。

⑷　日本列島における曽畑式土器編年傾向

１）曽畑式土器の学史

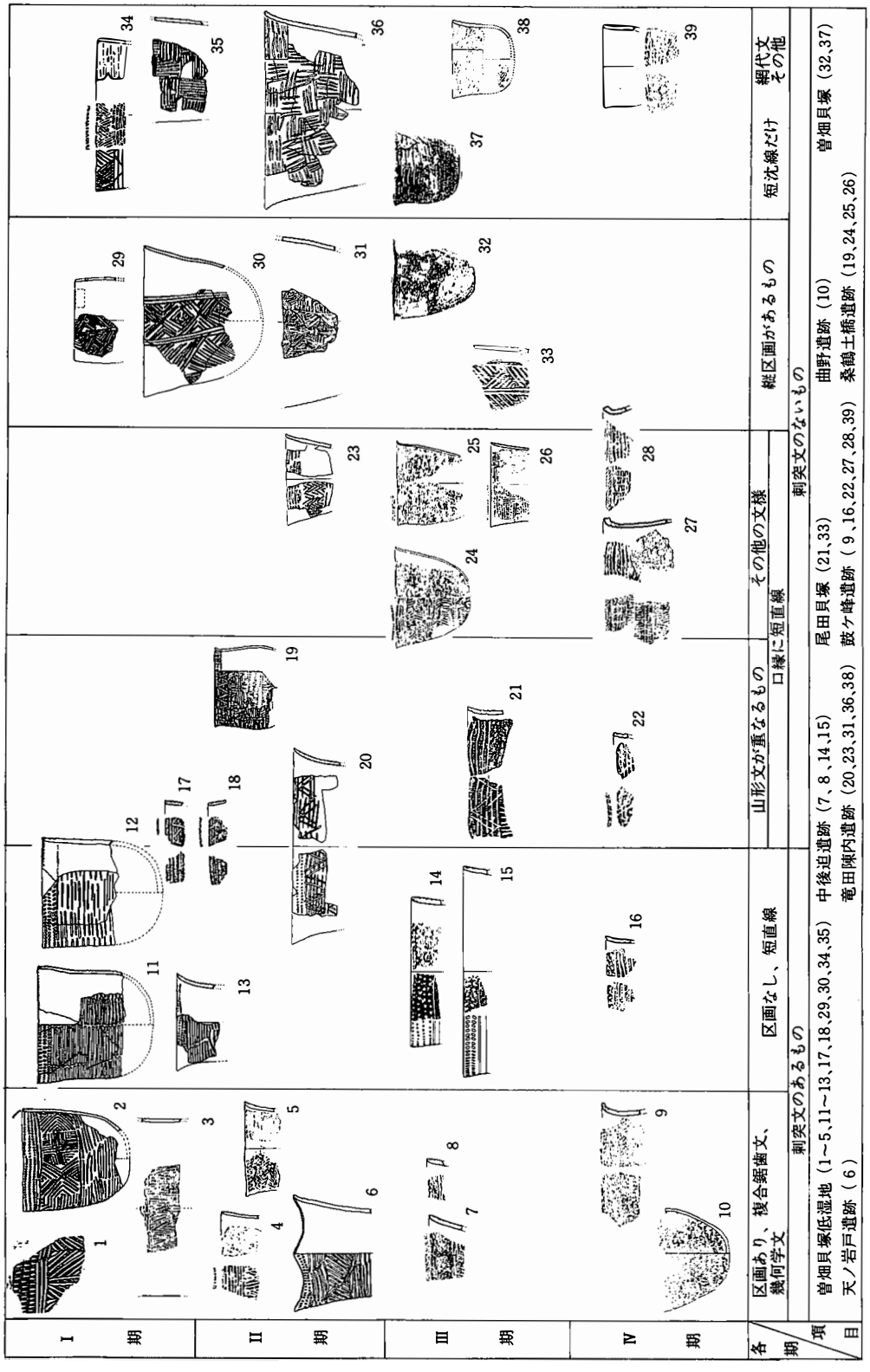
1890年曽畑式土器が学界に登場してから今日まで100年を経過することになる。曽畑貝塚の調査の歴史については先に少し記してきたところであるが、1935年小林久雄氏の「曽畑式土器」の形式名の設定の後、曽畑式土器をめぐって今日まで多くの論考が行われ、編年的位置づけが行われてきている。特に最近は西北九州を中心に恵まれた遺跡状況のもとでの発掘調査の成果が著しく、層位的な実証も加わり明確な編年作業も進んできている。

①1980年以前

発掘調査資料の少ないなかで、各地の資料を基に積極的な研究活動が実施されている。古く中山平次郎、横山將三郎、小林久雄氏らによって曽畑式土器が朝鮮半島釜山市東三洞貝塚や瀛仙町貝塚出土の櫛目文土器との関係が指摘されていたが、両者の相互比較に不可欠である九州地域を中心とした曽畑式土器の集成と編年の基礎的作業から進められることになる。

杉村彰一氏の「曽畑式土器文化に関する一考察」、「曽畑式土器論考」（1962.65）は最も基礎的作業が進められたもので、佐賀県唐津市西唐津海底遺跡・熊本県宇土市曽畑貝塚・鹿児島県大口市日勝山遺跡らの資料を基にした編年と文化伝播論が述べられている。文様構成・施文法を重視し、文様帯による区分法の確立に加えて、整然とした規則的な配列から不規則への移行が時期的移行となるとの視点である。「西唐津海底遺跡→曽畑貝塚→日勝山遺跡と変容し発展したものと理解できる」と第Ⅰ～Ⅲ期の時期区分が提示され、九州西北沿岸部→有明沿岸部→内陸部・薩南諸島との時期的変遷を見せるとの観点は以来、今日まで支持されてきている。曽畑式土器の出自については「第Ⅰ期の曽畑式土器は朝鮮半島櫛目文土器に類似する」との従来からの視点を踏襲している。この後、江坂輝彌・乙益重隆氏らの同様の編年作業が加わり、前者は西唐津海底遺跡資料の中に「隆帯文＋沈線文土器や口縁部にのみ刺突文を持つ土器群」が在ることを指摘している。

坂田邦洋氏の『曽畑式土器の研究』「長崎県福江市江湖貝塚」「熊本県玉名市尾田貝塚」がある。江湖貝塚は五島列島に位置する貝塚であり、九州西北沿岸部に加え列島に曽畑式土器が良好に存在することを示すとともに、土器形態、施文に非常なバラエティがあることを提示している。尾田貝塚は有明海内陸部にあり、貴重な地理的位置にある。出土している曽畑式土器は概して施文状況は新しいもののようである。坂田氏は放射性炭素の測定を数多く実施しており、曽畑式土器



第119図　熊本県地域曽畑式土器編年案

の年代が江湖貝塚ではＢ．Ｐ5310±40年（ＧＡＫ－4055マガキ）、尾田貝塚ではＢ．Ｐ4980±60など測定結果がある。曽畑貝塚でもＢ．Ｃ3240±130年であり近似した数値がかさなり、縄文時代前期での位置づけに対する大きな参考資料と成ってきている。

一方、鹿児島県鬼界カルデラ噴出のアカホヤ火山灰（Ｂ．Ｐ6,000～65,000年）が全国的に降下している事実が明らかにされるとともに、火山灰層に恵まれた鹿児島県地域を中心に曽畑式土器はこのアカホヤ火山層の上位から出土する事例が増加して、次第に周知の事実と成ってきている。熊本県地域でも比較的火山灰に恵まれた阿蘇外輪山西山麓で調査が行われた阿蘇郡西原村桑鶴土橋遺跡や菊池郡大津町中後迫遺跡でアカホヤ火山灰層の上位から曽畑式土器が出土することが確認されるに至っている。

②1980年以後

曽畑式土器の細分作業をはじめとして、成立起因の追求や成立後の展開と消失状況の追求など多くそして積極的研究活動が展開されてきている。

江坂氏が指摘した西唐津海底遺跡資料のなかの「隆帯文＋沈線文土器や口縁部のみ刺突文を持つ土器」が曽畑式土器に先行する土器群があり、鹿児島県出水市荘貝塚や日置郡阿多貝塚出土土器のなかに轟式土器から曽畑式土器へと移行すると考えられる土器群が注目されていた。そのような中で中村愿氏は『縄文文化の研究』に「曽畑式土器」を発表している。曽畑Ⅰ式は長崎県江湖貝塚や下本山岩陰出土土器を、曽畑Ⅱ式を熊本県曽畑貝塚出土土器、曽畑Ⅲ式は鹿児島県種子島本城遺跡・沖縄県東原遺跡出土土器らを基本土器としている。従来の編年をより具体化して資料を示しているが、注目されるものに曽畑式土器の生成と消滅に積極的な展開がある。それは生成に関する「阿多・野口タイプ」の設定である。これはみみず張れ突帯文を有する轟Ｂ式土器の新しいタイプのなかに曽畑式土器にみられる丸底を呈する器形があり、野口遺跡ではみみず張れ突帯文が沈線文に変わり、更に沈線による重弧文が充填された土器が存在することに注目したものである。阿多貝塚では沈線化は重弧文様に止まらず、羽状文やＸ字状文あるいは横位の凹線文が連続的に押引きされる文様などがある事なども加えている。そして、刺突連点文や爪形文などの刺突施文法は、瀬戸内地方や中国地方の前期前半にみられる伝統的手法であることなどから瀬戸内の羽島下層Ⅱ式土器の影響と考えている。一方終末は各地域で地方色を強く浮きだしているが、北西九州では新たな流入土器によって、後続の中期土期の母体を形成していたのであるとみている。

佐賀県小城郡三日月町竜王遺跡の発掘調査では曽畑式土器が層位的に上下に分けられる事例が報告され、下層に出土する土器は滑石混入土器が多く、上層の土器は文様構成が崩れたものなどが出土している。次第に層位的な実証事例がみられるようになってきている。

曽畑式土器の起源に関する論考は田島龍太「菜畑遺跡縄文前～中期の土器群の編年と様相」『菜畑』や渡辺康行「第Ⅲ群土器について」『長崎市立深堀小学校校舎増築に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告』が続いている。何れもその報文に詳しい。

前者は「プロト曽畑」を提唱している。菜畑遺跡発掘調査の結果に基づくものであり、第Ⅰ～Ⅴ期に分けられた中で第Ⅰ期〔菜畑15，16タイプ〕、第Ⅱ期〔西唐津タイプ〕〔野口，阿多タイプ〕がそうである。層位的な確証のもとで進められ、明確に第Ⅰ期は「隆帯文土器群と沈線文（弧線文を主体に幾何文を含む）土器群の共存で示されるもの」、第Ⅱ期西唐津タイプは「隆帯文土器と刺突文＋沈線文土器群（江坂曽畑Ⅰ式）で示される土器群」、また、西唐津タイプとは平行共存の地方差として捉えている野口・阿多タイプ土器群（中村愿：野口・阿多タイプは中間的な折衷タイプの土器群とする。）は野口Ⅲ類、阿多ⅤA-1.2、ⅤB-1～3、ⅤCで示されるとしている。なお、続いては第Ⅲ期〔江湖タイプ〕、第Ⅳ期〔曽畑タイプ〕、第Ⅴ期〔山鹿Ⅳ・Ⅴタイプ、轟C・Dタイプ、3式変容タイプ〕と成ることが明示されている。

後者は層位的な根拠を全てに擁したとはされないようであるが、菜畑遺跡で設定された〔プロト曽畑〕の範疇と捉える土器、またバリエーションに富む土器群が数多く提示されている。この第Ⅲ群土器は第1～9類に分類されている。第8類は隆帯文の数が減少したもので轟B式新期における単純退化型であり、また、第9類は条痕文だけの胴部片であり除くとして、その他の土器群に認められる施文技法として刺突文、押引文、沈線文、隆帯文があり、横位区画も隆帯文、刺突文、押引文、沈線文などで行われている。第5類の資料の中で主に沈線で区画をなすが、押引文での区画を行い同じく押引で重弧文を施す特徴的な土器も見られる。また、押引文と沈線文とを併用する資料があり、押引文から沈線文への移行を示しているとも見れよう。

一方、曽畑式土器に関して口縁部の内面施文状況を層位的な統計処理を行い、「内面に文様のないもの」→「内面の文様が刺突文だけのもの」→「内面の文様が刺突文＋沈線文のもの」と層位的に新しくなっていくことを確実に摑むことができている。

田中良之氏は縄文時代中期土器の祖形を追求するなかで、並木式土器の発生・成立に関して九州北岸に主として出土する押引文を有する土器群を「曽畑（新）式」と呼称している。また、曽畑式土器の新しい時期の土器として考える轟C・D式土器とは地域を異にして存在していたものとの見解がある。

最近、水ノ江和同、栗畑光博氏らの積極的研究が相次いで発表されている。前者は『西北九州における曽畑式土器の諸様相』であり、後者は『南九州における曽畑式系土器群の動態とその背景』である。

『西北九州における曽畑式土器の諸様相』では西北九州地域に限定をしているが、層位的・一括性に安定した資料を対象としており、曽畑式土器文様の「割りつけ」方法に関する施文パターンの変遷を基準とした編年試案と、展開論がある。西北九州曽畑Ⅰ式～Ⅲ式とされ、基本的見解は第Ⅰ式の「割りつけを定型的・計画的に土器外面全体に施すもの」の施文パターンの変化・消滅していく段階で続く第Ⅱ・Ⅲ式として捉えているものである。土器群は曽畑Ⅰ式は深堀遺跡第6層の江湖タイプの土器群、Ⅱ式は菜畑、伊木力遺跡土器群、Ⅲ式は山鹿貝塚第4層や元松原遺跡の土器群を典型例としている。口縁部の文様帯に刺突文が施文されたものは概ね古くされてい

たが、この捉え方をすると第Ⅱ段階に口縁部文様帯に刺突文があるものがあったり、逆に第1段階に口縁部直下から区画文を施す土器があることも述べられよう。そして、轟B式土器や阿多・野口タイプ土器群から系譜を引く諸特徴の存在が判明し、曽畑式土器成立に関する一側面を窺うことができたとしている。また、曽畑式土器の出現地は西北九州であると考え、ここを中心に九州全域に展開したものとしている。

　柔畑氏は南九州地域の曽畑式土器の集成作業を行っている。従来、南九州地域の代表的なものとして「日勝山式土器」が知られ、曽畑式土器の南下にともない地域色の強い土器としてのイメージを大きく変更している。西北九州地域で古く位置づけられる資料が多く提示され、八代海を介して早い段階で薩摩半島を中心とした地域に流入されている事実が示されている。また、その「先行する野口・阿多タイプの進出経路を発展させたものと考えられる」との注目される見解が述べられている。

註　引用・参考文献（1988年）

柔畑　光博「南九州における曽畑式系土器群の動態とその背景」　1988

甲元　真之『高畑赤立遺跡発掘調査報告書』蘇陽町教育委員会　1988

西住欣一郎『鼓ケ峯遺跡』熊本県文化財調査報告第96集　1988

丸山伸治他『竜田陳内遺跡』熊本県文化財調査報告第98集　1988